

「百年後なら」

——嘆きのインディアン その2——

青山 義孝

今日ここに、わが国の歴史上、自由への最も偉大なる示威行進として記憶されることになるであろうこの行進に、こうして参加できることはわたしの喜びである。

今から百年前、われわれが今日その人物像のもとに立っている一人の偉大なアメリカ人〔リンカーン〕が、奴隷解放宣言に署名した。この重要な行政命令は、それまで不正義の炎に身を焼かれていた何百万という黒人奴隷にとってすばらしい希望の篝火となった。それは長い間囚われの身だった奴隷たちの夜を終わらせる喜ばしい夜明けとなった。

しかし百年たった今も、まだ黒人は自由ではない。百年たった今も、黒人の生活は人種隔離の手枷と人種差別の足枷によって惨めなままである。百年たった今も、黒人は物質的繁栄を謳歌する大洋の真ん中で貧困の孤島に住んでいる。百年たった今も、黒人はアメリカ社会の片隅に衰弱した身体を横たえ、自分の祖国にいながらも他国にさまざま追放者さながらの状態に置かれている。

それゆえわれわれは今日、この恥ずべき状況を劇的に告発するために集まった。ある意味でわれわれは、この国の首都に小切手を現金化するために来たと言える。わが共和国の創設者たちが壮大な言葉で憲法と独立宣言を書いた時、彼らはその中に、全てのアメリカ人が享受すべき約束手形に署名したのである。その約束手形とは、すべての人々、つまり白人たちと同様に黒人たちにも生命、自由、幸福追求の譲渡すべからざる権利を保証するものであった。

黒人市民に関する限り、アメリカがこの約束手形の責務を履行しなかったのは今日明白である。この神聖な責務を尊重する代わりにアメリカは、黒人に対して不渡り小切手を切ったのだ。それは「資金不足」と書かれて返ってきた小切手である。われわれはこの国の「機会」という大金庫室に、かような資金不足があると信じることを拒否する。

だからわれわれは、この小切手を現金化するためにここにやって来たのだ。すなわち、要求に応じた自由の富と正義の保証を与える小切手を現金化するためにである。(King 102)

『悪魔の道』（原題 *Devil's Doorway*；邦題『流血の谷』）1950年制作。監督：アンソニー・マン。

1950年はインディアンを公正な視点から描こうとする新しい西部劇製作史において画期的な年であったと言える。この年には「嘆きのインディアン その2」の最後で取り上げた『折れた矢』（*The Broken Arrow*）のほかに『悪魔の道』（*Devil's Doorway*；邦題『流血の谷』）も公開されている。『悪魔の道』は、完成後プロ・インディアン映画であることを理由に観衆の批判を浴びるのではないかと懸念した製作会社が公開を見合わせていたところ、数カ月遅れて完成した『折れた矢』が同じくプロ・インディアン作品であるにもかかわらず、大受けをしたのを見て公開に踏み切ったという経緯がある。『折れた矢』よりも完成が早かったにもかかわらず、公開が先を越されてしまったことも手伝ってか、『悪魔の道』は『折れた矢』の二番煎じと見られてしまった。さらに、興行的にも失敗の憂き目を見ることとなった影響からか、西部劇を論じる際に取り上げられることも少ない。が、とはいえ、映画としては『折れた矢』に決して引けを取ることなく、むしろ『悪魔の道』のほうが玄人受けする出来栄といえよう。

『悪魔の道』はフィルム・ノワール作品を数多く製作していたアンソニー・マンが手掛けた最初の西部劇作品であり、ウェスタン・ノワールと呼ばれることもある。公開順では『ウィンチェスター '73』（*Winchester '73*）が、マンが手掛けた西部劇第1作となっているが、先ほど触れたような事情があって、製作順でいえば『悪魔の道』が第1作となる。

南北戦争に北軍の兵士として参加し、国会最高勲章を授与され除隊した、インディアン（シヨショーニ族）の青年ランス・プールが、ワイオミングの故郷メディ

スン・ボウに帰るところから話は始まる。白人と共に南軍相手に戦い、目覚ましい戦功を収めたことで、これからは白人とインディアンは人種の垣根を越えて仲よく暮らすことができると確信しているランスは、戦争中に野営の火のそばで夢見た計画を父親に語って聞かせる。スウィート・メドウズを太陽の光がさんさんと降り注ぐ平和な農場にするんだ、戦争が国を変えたんだよ、意味もなく人が死に、残されたものはおれのように平和を求める、戦争も差別も終わって国は成長しているんだ、肌の色など関係ない、もはや違いはないんだ、と言うランスに向かって父親のビッグ・トゥリーは、家に戻れば元のインディアンに逆戻りさ、と答える。ランス、お前の眼には鱗がついていて真実が見えていない、そのうち真実を思い知らされ、目が覚めるさ、われわれは呪われた民族だ、白人に忌み嫌われている、白人と共に生きることなどできはしない、道は一つ、強くなることだ、この父親のいわば死の床での言葉通り、ランスの希望は見事に裏切られることとなる。

物語はホームステッド法をめぐって展開する。『シマロン』(Cimarron)でもみたように、また1953年制作の名作『シェーン』でも重要なモチーフとして取り上げられているように、ホームステッド法は多くの西部劇のテーマとなっている。1785年の土地法制定、1803年のジェファソン大統領によるルイジアナ購入、1804年から1806年にかけてのルイス&クラーク探検隊による探検、1825年のエリー運河の開通、1830年のボルチモア・アンド・オハイオ鉄道の開通などを経て、西漸運動に加速がかかり、西部開拓は展開していったが、その動きにさらに拍車をかけたのが、1862年5月20日にリンカーン大統領の署名によって成立したホームステッド法である。

西部の発展の結果、公有地の扱いに関して西部住人の主張が認められるようになったが、西部住人の主張は自然権をその理論的根拠としていた。1812年には真正アメリカ人協会なる組織が誕生し、アメリカ生まれのアメリカ人は生まれながらにして土地所有権を有し、アメリカの土地を所有することは当然であると主張した。その後1845年には明白なる宿命論が声高に叫ばれ、拡張主義が、年々増加するアメリカ国民の自由な発展のために神が割り当てたこの大陸を覆うように拡大していくという明白な宿命・摂理、我が国の住民を西へと押し動かす一般的法則という形で、神の摂理や一般法則として正当化されるに至り、西部開拓に拍車がかかったが、翌46年、後にリンカーン大統領暗殺後大統領

職を継いだアンドリュー・ジョンソンがホームステッド法を議会に提出した。保守派のノー・ナッシング党などの反対もあって、1860年6月19日ようやく両院を通過する運びとなったものの、西部への移住者の多くが反奴隷制論者であったことから、西部に反奴隷州が出現するのではないかと懸念し、難色を示していた南部に同情的であったビュキャナン大統領は拒否権を行使した。その後、南北戦争の勃発によって南部議員が議会から離脱したため、リンカーン大統領の署名を得て成立に至ったのである。

『悪魔の道』の舞台は南北戦争直後から1870年にかけてのワイオミングである。物語冒頭でランスが除隊後故郷に帰還する場面は1865年であると思われる。その後、牧畜業で成功を収め「金持ちのインディアン」になってからの本筋の場面は、敵役のヴァーン・クーラン弁護士が、シャイアンへ行ったのは南北戦争直前のことだから9年前になる、と語っていることから1870年と推測される。1868年にユニオン・パシフィック鉄道が開通し、同年7月25日にワイオミングが準州へと昇格し、翌69年12月10日に準州法が成立するといった時代の物語である。当然、成立間もないホームステッド法が準州にも適用されることとなり、その急速に変貌を遂げていく時代に翻弄されるインディアン悲劇に焦点が当てられる。

1865年の物語も1870年の物語も同じ酒場のシーンから始まるが、1870年の酒場には準州法によって定められて「インディアンへのアルコール提供禁止」の貼り紙が貼られている。クーランの手下による酒場での銃を使っての嫌がらせに業を煮やしたランスは、その相手をたたきのめした直後に、酒場で耳にしたホームステッド法がいったいどういうものなのか確かめようと、事務所開きしたばかりの女弁護士オリー・マスターズ法律事務所へ最初の顧客として出かけていく。

ネブラスカとカンザスでの牧羊業が行き詰まり、多くの牧羊業者がワイオミングへ移動し始めていることから不安を感じたランスは、自分の土地を申し込めば法律が見方をしてくれるはずだというオリーの言葉を信頼して、申請書作成を依頼する。

ホームステッド法第二項は申請の条件を次のように規定している。

第二項 本法の適用を受けようとする者は、登記をおこなおうとする公有地事務所の登記係官への申請に際し、同係官または会計係官の前で、同人が一家の長であるかまたは二一歳以上であり、ま

たは合衆国陸海軍において軍務に服した者であること、合衆国政府に武力で敵対したり合衆国政府の敵対者に援助を与えたりしてはいないこと、その申請が本人のみの使用と利益のためになされていること、この土地への立ち入りが事実上の定住と耕作の目的のためになされるもので、直接にも間接にもいかなる他人の使用や利益のためになされるものではないことを宣誓しなければならない。申請者は、この宣誓書を登記係官または会計係官に提出し、一〇ドルを支払うことによって、特定の土地への入植が許可される。ただし、この登記の日から五カ年を経過するまでは、いかなる権利証書も譲渡証書もその土地について発行されることはない。(Commager 410；平野孝訳)

ここに規定されている条件をすべて満たしていることがわかったので、ランスは申請費用として一〇ドル、手続き費用として一〇ドルをオリーに支払い、当局からの返答を待つことになる。

しかしながら、ランスの申請は却下される。インディアンに法は適用されないというのがその理由である。確かに公有地の事実上の入植者に自営農地を取得させる法律であるホームステッド法第一項は次のように規定している。

何人も、一家の長か二一歳に達した者で合衆国市民である者、または合衆国市民たらしめる意志を合衆国の帰化法の定めに従って表明した者で、かつ合衆国政府に武力で敵対したり合衆国政府の敵対者に援助を与えたりしたことがない者は、一八六三年一月一日以降、一区画として存在し、公有地の正式な分割法に合致し、測量の完了した土地であって、同人がすでに先買権の請求をおこなっているか、あるいは申請時において一エーカー一ドル二五セントまたはそれ以下の価格で先買権の対象とされている四分の一セクション〔一六〇エーカー〕またはそれ以下の面積の未占有の公有地、あるいはまた一エーカー二ドル五〇セントの価格で先買権の対象とされている八〇エーカーまたはそれ以下の未占有の公有地に入植する権利を認められる。ただし、ある土地を所有し、またはそこに居住する者が、本法の規定によって同地に隣接する土地を取得しようとする場合、すでに所有し占有している土地と合わせて一六〇エーカーを超えてはならない。(Commager 410；平野孝訳)

インディアンであるランスはアメリカ合衆国市民ではないため、法の適用を受けることはできないというわけである。市民でないのならおれは何なのだ、と問うランスに、オリーは申し訳なさそうに、被後見人よ、と答える。なんとかならないのかと訴えるランスに、オリーは法改正の嘆願書を提出しようとして提案し、住人達の署名を集めるが、クーランの小細工によって、その試みも不調に終わり、ランスは最後の手段として武力に訴えることを決意する。衝突の悲劇を回避し、何とかしてインディアンを救おうと願うオリーは、ララミー砦の騎兵隊に出動要請の連絡を取る。結果は多勢に無勢、抵抗を諦めないインディアンに対し、最後は騎兵隊も戦闘に加わり、インディアン側は唯一の男であるジミー少年と少数の女子供以外全滅し、全滅を免れたインディアンは居留地へと赴く。

『悪魔の道』はホームステッド法をめぐって、市民と被後見人としてのインディアンを浮き彫りにしているが、この映画には第二次大戦後のアメリカにおけるインディアン政策の揺れが反映されていて面白い。内田綾子の「スー族と連邦管理終結政策——1960年代前半のサウスダコタ州管轄権法」によれば、第二次大戦後、アメリカ政府はインディアン部族に対する管理を州へ移行する連邦管理終結政策 (Termination Policy) に着手し、1953年にインディアンを被後見人から市民へと変更することを決議した。これは同化政策の一環であるが、従来、居留地で部族の自治を維持してきたインディアンにとって、州の管轄に入ることは州税を課されて土地基盤を失い、アメリカ社会へ同化することを意味した。インディアンにとってアメリカ社会への同化は部族消滅を意味し、全米アメリカ・インディアン議会 (National Congress of American Indians) は当然のことながら当初から連邦管理終結政策に反対の立場を表明した。その結果、58年までに部族の同意を得ない一方的な終結政策は見直され、1960年代に入ると、ケネディー大統領とジョンソン大統領はインディアンの自治を尊重する姿勢を示し、それまでの同化主義的な連邦管理終結政策は自決政策へと移行した。もちろん『悪魔の道』は1950年の制作であるので、終結政策が両院で決議された1953年よりも3年早いことになるが、インディアン政策をめぐるブレイクストーンミッドランド状況の中で製作されたと考えてしかるべきであろう。

インディアンの市民権に関しては、1881年の年次教書においてチェスター・アーサー大統領が従来のインディアン政策に加えた修正に端を発しているが、さら

に1887年には、ドーズ土地割当法が制定された。正式名称をインディアン一般土地割当法と言うドーズ法は、試験的ないしは部分的にすぎなかったとはいえ、白人とインディアンの関係のあらゆる側面を扱かうなかで、インディアンがアメリカ市民となるのか、それともアメリカ内の異邦人であり続けるのかを決定した。すなわち、同法によってインディアンに対する土地の割り当てが規定され、土地を割り当てられたか、部族の生活から独立したインディアンには合衆国市民権を与えることが規定された。しかしながらドーズ法はインディアンにとって好ましいものではなかった。この点で、ウィルコム・ウォッシュバーンの『インディアン部族主義攻撃』と題するドーズ法論に収録された同法反対意見は示唆に富んでいる。

1880年5月28日に下院インディアン問題委員会は、インディアンの単独所有地割当の権限を内務長官に与える法案を本会議に提出したが、この法案に対して、ラッセル・エレット、C.E.フッカー、T.M.ガンターの三名が連名で反対意見を提出した。その中で三人は

本法案の主目的は、インディアンを救済したり、インディアン問題を解決したり、インディアン騒ぎから抜け出す方法を提供するというよりは、むしろ、価値あるインディアンの土地を手に入れて白人の植民のために開放する方法を提供することにある。[……] 本法案の真の狙いは、インディアンの土地を取り込み、それを入植者に開放することにある。見掛け上インディアンのためと称する条項は、実はインディアンの土地を取り込み、その土地を占有するための口実に過ぎない。これが達成されると、われわれは大陸のこの部分に住むインディアン種族の絶滅への道を実に確実にならし終えることになる。これがどん欲の名のもとでなされても十分に悪いことだが、人道の名においてなされることは、しかも、本人の意思を無視して、インディアンをわれわれと同じように変えることによってインディアンの福祉を促進する熱心な願望という一方的装いのもとでなされることは、はるかに悪い。したがって、連邦議会の法律とか内務長官の慈悲によってインディアンを白人に仕立て上げようとする企ては、この上なく露骨で、厚かましく、不当なものである。(Washburn 39)

と鋭い指摘をしている。本法案提出者であるヘンリー・ドーズは人道主義的な政治家であったので、ここで指

摘されているような「真の狙い」がドーズにあったわけではないであろうが、本法案が目指したインディアンの同化は達成されなかった。ドーズ法制定から半世紀足らずの間に、六千万エーカーのインディアンの土地が白人に売り渡され、インディアンの個人に割り当てられた土地の大半が売り渡され、インディアンの消滅がささやかれるようになった。人道主義的ジェノサイドとでもいえそうな歴史の皮肉である。

ランスは最後、軍服姿で岩から姿を現し、騎兵隊の隊長とオリーの眼の前までたどり着くと隊長に敬礼をしてそのまま前のめりに倒れ込んで息絶える。この終わり方、直前までインディアンとして戦っていたランスが北軍の軍服に身を包んで死ぬという終わり方は、やはり1950年という時代の制約か。映画完成後も内容が、当時としては、あまりにもインディアンびいきであることから、公開を見合わせ、遅れて完成した『折れた矢』に先を越された事実にも表れている通り、この『悪魔の道』は製作者側に白人の不興を買うのではないかという逡巡があった。そのためらいが、反抗するインディアンが最後は軍服を着て敬礼をするという形で「同化」する筋書きを選択させたのであろう。

もうひとつ、時代のあおりを受けているのがランスとオリーとの間の愛である。当時の映画では異人種間の愛、特に白人女性と非白人男性の愛はご法度であり、普通は男が死ぬ設定にして問題を解決していた。そのため、『悪魔の道』でも二人の愛は成就しない。最初のうちはランスに対して人種差別的偏見をもっていたオリーだったが、やがて同じ人間としてインディアンに対する同情が芽生え、その同情もやがて愛情に変わっていく。しかしながら、ランスは、オリーがほかの白人同様肌の色を気にし、ランスとの間に距離を置いていたと非難し、百年後なら何とかなっただろうが、と言ってオリーの愛を拒否する。

この「百年後なら何とかなっただろうが」というランスの台詞には二重の意味を読み取ることができる。一つはランスとオリーの愛という面の意味で、もう一つは白人対インディアンの関係という裏の意味である。物語は1870年ころに設定されているから、百年後は1970年前後になる。まさしくレッド・パワー全開の時代である。また百年後は逆に見れば百年前である。「百年前」で思い起こされるのは冒頭に引用したマーティン・ルーサー・キング牧師が「私には夢がある」で語った「今から百年前」ということばである。

『馬と呼ばれた男』（原題 *A Man Called Horse*）
1969年制作。監督：エリオット・シルヴァースタイン。

さて『折れた矢』にも『悪魔の道』にも共通して超えることのできない壁があった。それはことばの壁である。両作品ともインディアンが話すことばは、一部のシーンを除いて英語である。しかも『折れた矢』ではコーチズはジェフ・チャンドラーが、ソシアレイはデブラ・バジェットが演じ、『悪魔の道』のランスはロバート・テイラーが演じ、レッド・ロックはジェイムズ・ミッチェルが演じた。インディアンに扮したのはいずれも白人の役者である。この壁に果敢に挑戦したのが『馬と呼ばれた男』シリーズである。

偶然ながら、『悪魔の道』の最後のシーンでランスが口にした（ほぼ）「百年後」に当たる1969年に製作されたのが『馬と呼ばれた男』である。これは『馬と呼ばれた男』三部作の第一作であり、1976年には続編『馬と呼ばれた男の帰還』（*The Return of a Man Called Horse*; 邦題『サウス・ダコタの戦い』）が製作発表され、1983年には第三作の『馬と呼ばれた男の勝利』（*The Triumphs of a Man Called Horse*; 本邦未公開）が製作発表された。ただし、第三作は前二作の主人公である馬と呼ばれた男は冒頭で白人に殺され、その後画面に登場するのは前作のシーンがフラッシュバック的に映し出されるのみである。主人公となるのは馬と呼ばれた男とインディアンとの間に生まれた混血の息子であり、父親の仇打ちという復讐劇のストーリーも映画の出来も散々の駄作である。

『馬と呼ばれた男』の原作はドロシー・M. ジョンソンの同名タイトルの短編小説、15ページほどの小品である。ボストンの名門家庭に生まれた主人公は、西部には自分と対等の人間がいるに違いない、西部のインディアン地方ではすべての白人が王で、自分もその一人になりたいと願い、1845年に西部探検に出発する。ところが、クロウ・インディアンに囚われてしまい、馬と呼ばれ家畜同然の扱いを受けながらも敵対部族との戦いで功を立てて認められ、その後、無事ニュー・イングランドへ帰還するというインディアン捕囚物語である。

このありきたりの捕囚物語を大胆なプロ・インディアン西部劇に仕立て上げたのが映画『馬と呼ばれた男』である。もちろん原作にもインディアンに対するシンパシーは強調されている。馬と呼ばれた男は14歳のプリティ・カーフと結婚することによって自分が人間（ハーフ・インディアン）に復帰したことを実感する。

イエロー・ハンドの間では、男が死ぬとその母親は自ら手の指を切り落とし、集落で爪はじきされて、冬になると寒さと飢えで最期を迎えるのが風習となっているのだが、馬と呼ばれた男の義母グリーズビー・ハンドは、最後、敵対する部族に息子を殺され、娘以外にまったく身寄りのない身となってしまい、両手の指はすべて第一関節で切り落とされている。その直後、馬と呼ばれた男の妻、プリティ・カーフは死産をしたのち、息絶えてしまう。機会さえあればいち早くボストンへ帰還しようと考えていた馬と呼ばれた男は、妻が死んだら夫は妻の家族とは縁が切れて何の義務もなくなると言っていたのを思い出し、これで俺は自由になったんだ、と思う。翌朝、馬と呼ばれた男は出発を決意するが、その馬と呼ばれた男にグリーズビー・ハンドは「息子か？」と声をかける。このままでは係累を亡くしたグリーズビー・ハンドが悲劇的な最期を迎えることは火を見るよりも明らかである。馬と呼ばれた男は、東を見つめ、二千マイル向こうにはおれの家があると思いつつも、この老婆は永遠に生きるわけではない、待ってやればいいんだ、おれは若いんだから、と思ひ、「義母(かあ)さん」と答える。三年後にグリーズビー・ハンドが死に、馬と呼ばれた男はボストンに帰還するが、家族に対して詫げることも自慢することもなかった。地上のすべての人間と対等になれたからである。

以上が原作のストーリーであるが、映画では主人公はジョン・モーガンという名前のイギリスの貴族ということになっている。原作では名前のなかった主人公がジョン・モーガンという名前を与えられているのはともかくとして、ボストンの名門の出からイギリスの貴族へ変更されている理由は不明である。モーガン役にイギリスの名優リチャード・ハリスが起用されたのがあるいは理由の一つかもしれない。また時代も原作を20年以上遡って1820年代初頭に設定されている。

退屈な貴族生活に不満を感じ、冒険を求めてイギリスからアメリカにやってきたジョン・モーガンは、大平原で水浴中、スー族に見つかり拉致されてしまう。水浴びのシーンは白人の文明世界からインディアンの世界への通過儀礼として重要な意味を与えられている。案内役の4人の白人はみな殺されるが、モーガンだけは文明性の衣を脱ぎ捨てた裸の姿のまま馬に引かれて、酋長イエロー・ハンドの元へ連れて行かれる。スー族の集落で、5年前から囚われの身となっている白人バチストから、スー族についてさまざまなことを教えられる。

翌日、敵対する部族の酋長ブラック・イーグルがやってきて、イエロー・ハンドの妹ランニング・ディアに求婚するが、モーガンに魅かれ始めているランニング・ディアに拒絶されてしまう。そんなある日、モーガンは敵対する部族の斥候を捕らえ、剥いだ頭の皮と馬を結納として贈ることに成功し、ランニング・ディアの心を勝ち取る。

イエロー・ハンドは、モーガンにスー族になるための試練としてサンダンスの儀式を課す。残酷さを理由に19世紀末から1960年代に至るまでアメリカ政府によって禁止されていたサンダンスであるが、この試練をも克服したモーガンは晴れてスー族の仲間入りを果たし、ランニング・ディアとの結婚を許される。

ところが、結婚の申し出を断られたブラック・イーグル率いるショショニ族がスー族の集落に急襲を仕掛け激しい戦闘が始まる。激しい戦いの中で、次々と仲間たちが殺され、イエロー・ハンド、バチスト、そして身重のランニング・ディアまでもが命を落としてしまう。モーガンはグリーズイー・ハンドを母と呼び、集落にとどまる。多くの犠牲者を出しながらも、戦いに勝ったスー族だったが、愛する妻と多くの仲間を失ったモーガンは、グリーズイー・ハンドの死後、イギリスに帰る決意をし、旅立つ。

この『馬と呼ばれた男』は、アメリカン・ニュー・シネマの流れの中で制作された注目すべき西部劇である。そればかりか、きっかけはともあれ、白人がインディアンの仲間に入り、共に生活して、インディアンの娘と結婚し、部族のため共に闘い、最後は酋長にまでなるという内容であり、単なるインディアン同情型西部劇の域を超えていると見なすことも可能であろう。

マーク・グロスマンによれば、『馬と呼ばれた男』は70年代に新たに登場したインディアン映画の草分け的作品である (*The ABC Companion to the Native American Rights Movement*, 180)。グロスマンはその理由を明かしていないが、第一に挙げるべきは映画における言語の扱いおよびサンダンスを初めとする儀式の描写であろう。異民族を描く際の言語の問題は、映画でも文学でも越えがたいハードルである。『折れた矢』の冒頭のナレーションでトム・ジェフォードが、この映画が史実と異っている点はインディアンが英語を話す点であると述べていたことにも表れているように、ことばの扱いは難題である。そのことばの問題を『馬と呼ばれた男』は原作には登場しない人物を配することによって解決しようと試みている。映画では、馬と呼ばれた男が集落に連れて行かれる5年前から囚われ

の身になっているバチスタという白人がいる。5年間インディアンの集落で生活したことからインディアンの言葉を話せるようになっていくバチスタが、馬と呼ばれた男とインディアンの間で通訳の役目を果たすのである。ストーリーの大半がインディアンの集落を舞台とし、登場するインディアンはインディアンの言語（おそらくはラコタ語）のみを話す『馬と呼ばれた男』のような作品にとって、こうした通訳の配置は効果的である。

サンダンスは原作では言及されておらず、主人公の馬と呼ばれた男がインディアンの一員となるための通過儀礼としてのサンダンスが、この映画における最重要テーマとなっている点は注目に値する。サンダンスのシーンは第二作の『馬と呼ばれた男の帰還』でも重要なテーマとして描かれているが、原作にはないサンダンスを映画化にあたって取り入れた背景には、制作の前年に設立されたアメリカ・インディアン・ムーブメント (AIM) の影響が考えられるであろう。AIM設立に向かう流れの中で中心的役割を果たしたデニス・バンクスたちが、インディアンの誇りとアイデンティティーを取り戻すために注目したのが、19世紀後半から長い間にわたって白人によって禁止されていたサンダンスの復活であった。

バンクスはAIMの運動を展開していく中でAIMにとって必要なのは精神的支柱であることに気づき、インディアンの精神性を追求した。バンクスはクライド・ベルコートに「クライド、俺たちは、アメリカン・インディアン・ムーブメントの精神的方向性を見つけ出さなくてはならない。仲間のほとんどは教会に通い、自分たちをキリスト教徒だと思っている。でも俺たちはインディアンだ。俺たちの宗教がどこかにあるはずだ」(Banks 石川, 越川訳)と語り、インディアンの精神性の支柱がサンダンスであることを見出す。

平原インディアンの儀式の中で、最も聖なる、深遠なる儀式はサンダンスだ。ラコタ・スー族のメディスンマン、ピート・キャッチスはサンダンスを「あらゆる儀式の中で最も威厳のあるもの」と評する。それは徹底した自己犠牲の儀式であり、生命の再生の儀式でもある。(Banks 石川, 越川訳)

バンクスは自らの体験をこう述懐している。

四日目、我々は胸に串を通してもらった。自分の

身体肉片を切り取って偉大なる精霊に捧げるのだ。ポケットナイフで胸の心臓あたりに切り込みを入れ、そこに木の串を通す。私に串を通してくれたのはレイム・ディアだった。気持ちが大きく昂ぶり、痛みなどまったく感じない。それから胸に通した串に縄をくくりつけて聖なる木に結びつける。そのままの格好で踊りを踊ったあと、私は身体を思いきり後ろに引いた。木製の串が、地面に飛ぶ。自由になった私は全力で地面を走る。その後、切り取った肉片を偉大なる精霊に捧げた。

私はサンダンスの道を信仰する者である。この道を選んだことを後悔していない。私の子どもたちは、オジブエとラコタ・スー族の血が混ざっているが、全員サンダンサーである。AIMとサンダンスの精神性が一つに結びついたのは、とても素晴らしいことだ。(Banks 石川, 越川訳, 一部私訳)

『馬と呼ばれた男』はこのサンダンスを初めとするインディアンの儀式を重要な要素として大々的に取り入れたのである。ポスターには“authentic”(「史実に忠実な」という文字が躍り、「おそらくはアメリカ・インディアンを比類なき正確さで描いた最初の映画」と前宣伝がなされた(*The Only Good Indian* 84)。

ところが、『馬と呼ばれた男』に対するインディアン側からの評判は芳しくなかった。特にAIMはこの映画を酷評し、全米でボイコット運動を繰り広げるほどであった。バンクスによれば、

サンダンスは、外部の者が書いた本や映画などでかなり誤解されて伝えられている。多くは、儀式の背後にある意味をまったく無視し、野蛮な未開の儀式と解釈する。長い間サンダンスは法的に禁止され、それを行なった者は刑務所に送られた。しかし儀式は人々の心の中でずっと生きつづけ、逆境にもめげず、政府の役人の目から遠く離れた隠れた場所で、秘密裏に続けられていた。

サンダンスは、部族の一員として迎える入会式でもなければ、勇敢さを競うための場でもない。サンダンスを踊り、自ら苦痛を受けることで、病の親戚や友人に癒しをもたらす。自己犠牲をして、

愛する息子や兄弟が、遠く離れた戦地から無事に帰還することを祈る。サンダンスはラコタ・スー族の部族としての生き残りを支えてきた。(Banks 石川, 越川訳)

ということである。さらにバフィー・セイント・マリーは「これまで観た映画の中で最も白い映画」と評し、『馬と呼ばれた男』で描かれている風習はスー族のものでなくクロウ族のものでない。『インディアン』という名の純正ハリウッド部族のものだ」というものであった(*The Only Good Indian* 124, 206)。

参考文献

- Banks, Dennis with Richard Erdoes. *Ojibwa Warrior: Dennis Banks and the Rise of the American Indian Movement*. Norman: U of Oklahoma P, 2004. Kindle edition.
バンクス, デニス, リチャード・アードス. 『死ぬには良い日だ——オジブエ族の戦士と奇跡』. 石川史江, 越川威夫訳, 三五館, 2010年.
- Commager, Henry Steele, ed. *Documents of American History*. Ninth ed. Vol. 1. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1973.
- Friar, Ralph E. and Natasha A. Friar. *The Only Good Indian . . . The Hollywood Gospel*. New York: Drama Book Specialists/Publishers, 1972.
- Grossman, Mark. *The ABC Companion to the Native American Rights Movement*. Santa Barbara: The ABC-CLIO, 1996.
- King, Martin Luther. *I Have a Dream: Special Anniversary Edition: Writings and Speeches That Changed the World*. New York: HarperSanFrancisco, 2003.
- キング, M. L. 『私には夢がある——M. L. キング 説教・講演集』. 梶原寿監訳. 新教出版社, 2003年.
- 大下尚一, 有賀貞, 志邨晃佑, 平野孝編. 『資料が語るアメリカ——メイフラワーから包括通商法まで』有斐閣, 1989年.
- 内田綾子. 「スー族と連邦管理終結政策——1960年代前半のサウスダコタ州管轄権法」.
<https://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/IAS/ras/30/uchida.pdf>.
- Washburn, Wilcomb E. *The Assault on Indian Tribalism: The General Allotment Law (Dawes Act) of 1887*. Ed. Harold M. Hyman. Philadelphia, New York: J. B. Lippincott, 1975.
- Silverstein, Eliot. *A Man Called Horse*. 1969. MGM DVD.
- Mann, Anthony. *Devil's Doorway*. 1950. MGM DVD.